令和２年（2020）
阿づまの光
4月号・Aprilo

題字出口直日
通巻第６１３号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

【瑞泉苑土＋高熊山土＋瑞泉苑玉の井のお水、（内）高熊山コバノミツバツツジ釉（外）瑞泉苑椿釉】

教主さまお作　「玉の井（たまのい）」

マイ箸は持たれましたか？

大本東京宣教センター次長　橋本　伸作

祭とは、天と地、神と人との「真釣りあわせ」であると教えられています。厳粛な祭典の後に行われる「直会」も、祭典の一部として、神さまとともに「直り会う」、神人和楽の儀式であります。その神さまとともに直会を頂く架け橋となるのが、「お箸」です。箸の上部分の箸頭（天とも言う）は神さま、箸先は人によって結ばれ、私たちはご神徳に浴するのです。

端と端を繋ぐ「橋」、高所と地上を繋ぐ「梯子」など、「はし」という言葉には、一方と一方を繋ぐ意味があるようです。箸も例外ではありません。昔から箸には神さまが宿ると考えられ、神と人とを結ぶ道具として大切にされてきました。また、お膳に箸を横一文字に置くのも、これから頂く命（食べ物）と私たち人間との「結界」の意味があり、天地の恵みに感謝して、その結界（箸）を取り上げた時、箸は命を繋ぐ架け橋（箸）となるのです。

江戸時代末期、うなぎ屋が酒樽の端材を加工して客用の使い捨て箸を考案。これが「割り箸」の始まりと言われ、その後、国内の間伐材や端材を利用して割り箸が普及しました。

ところが近年、飲食店やコンビニの台頭によって割り箸の需要が急増すると、国産の割り箸が衰退し、海外の安価な輸入品で占められるようになりました。日本人が年間に使用する割り箸の量は約１９０億膳（一人平均１５０膳）にのぼり、海外（主に中国）の森林伐採や、使用後の廃棄処理によるＣＯ２の排出が指摘されているところです。

そこで環境に配慮した試みとして誕生したのが「マイ箸」運動です。すでに実践しておられる方もおられ、新しい日本の文化として広まりつつあります。

綾部・亀岡・東京の三本部では、４月の月次祭（東京本部は春季大祭）から直会には割り箸を付けず、マイ箸を持参していただくようお願いすることとなりました。このマイ箸運動が善い型となって、環境問題の改善につながる架け橋になればと願っています。

さあ、皆さんはもう、「マイ箸」は持たれましたか？

今月の聖言

国のため世人のためと言ひながら
世の大方は身のためにする

出口王仁三郎聖師

王仁三郎の耀盌と利休の楽焼

～耀盌顕現70年の輝き～

70年前、美術評論家・加藤義一郎氏が「耀盌（ようわん）」と名付け、その輝きを絶賛した出口王仁三郎手作りの楽焼茶盌。色彩美ゆたかな茶盌はどのようにして誕生したのでしょうか。制作に携わった佐々木松楽師の直孫・佐々木虚室先生に耀盌誕生の経緯とその魅力についてお話しいただきました。

佐々木家は115年前の明治38年、初代の佐々木吉之介が清水寺門前に「昭楽窯」を開窯したのが始まりです。大正に入ると、一般客を対象にその場で絵付けをしてすぐに焼いてお渡しするという「即席焼き」をしていました。そこへたまたま出口王仁三郎聖師がお越しになられ、絵付けを体験されました。それ以来、王仁三郎聖師は、たびたび清水に通われ、絵付けをされていたそうです。そのことがご縁で、佐々木家は大本に入信しています。

昭和19年8月、祖父の二代・佐々木成三が戦火を逃れて亀岡に疎開しました。当時は戦中の厳しい時代で、作陶だけでは生計は立ちませんでしたので、祖父は軍事工場に勤めながら、ほそぼそと作陶を続けていたそうです。そこへ同年12月28日の年の瀬の押し迫った夜、王仁三郎聖師が突然わが家にお見えになり、祖父に茶盌を作りたいとおっしゃって、その日から茶盌作りを始められ、4日後の元旦には窯焚きを行っています。それが耀盌の始まりです。以来、わずか1年3カ月の間に3600個もの茶盌をお作りになりました。

茶の湯のために作られた楽焼

ここに王仁三郎聖師の耀盌「御遊（ぎょゆう）」と楽家初代長次郎の黒楽「禿（かむろ）」の2つの茶盌の写真をご覧いただいております。どちらも楽焼ですが、その色合いは全く対照的です。「耀盌」の名付け親である加藤義一郎氏は、王仁三郎聖師の楽焼は、これまでの楽焼の常識から天と地ほどかけ離れた茶盌だとおっしゃいました。では、楽茶盌の常識とはどのようなものでしょうか。

古来の陶磁器窯のうち中世から現在まで生産が続く代表的な6つの窯（越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前）を日本六古窯（ろっこよう）と言います。これらの茶盌は「地域産業的」とも言えるもので、陶芸用の良質の土がある、窯を築くためにほどよい丘陵がある、きれいな水、豊かな薪があるなど、茶盌作りに適した環境の中で発展してきました。

しかし楽焼は違います。楽焼は千利休が茶の湯で使う道具として長次郎に作らせた茶盌です。つまり明確な目的をもって生み出されたものなのです。

お茶は鎌倉時代の初期に臨済宗の栄西禅師が中国へ渡った折、お茶の実を日本へ持ち帰り、それを京都・栂尾（とがのお）にある高山寺に植えて栽培を始めたのが最初です。もちろん平安時代からお茶は中国から輸入して貴族らが飲んでいましたが、栽培を始めたのは高山寺が最初です。

室町時代になって、高山寺のお茶の苗は宇治に移され、全国へと広がっていきますが、栂尾で作ったお茶を「本茶（ほんちゃ）」と言い、それ以外の場所で作られたお茶を「非茶（ひちゃ）」と呼んでいました。当時、この「本茶」と「非茶」を飲み比べて当てる「闘茶（とうちゃ）」という遊びが、公家や武士の間で流行ります。そのとき茶盌や茶壺などを持ち寄って自慢し合います。「曜変天目」もこのころ盛んに使われました。「本茶」か「非茶」かを当てた人には、記念の茶盌が貰えたそうです。

そんな時、一休禅師の弟子で村田珠光（じゅこう）という人が登場します。珠光は闘茶や茶盌自慢ではなく、本来のお茶のあり方を見極めようと、お茶の中に禅を取り入れます。それが「わび茶」の始まりです。その後、利休の師匠である武野紹鷗（じょうおう）のもとで茶の湯はさらに深まり、利休によって大成されました。この「わび茶」の精神を具現すべく、利休が長次郎に作らせたのが「楽焼」なのです。まさに茶の湯と禅とは一体であるという「茶禅一味」の姿を表したのです。

そう考えると、王仁三郎聖師が、信楽焼でもなく備前焼でもなく、なぜ楽焼を選んだのかということが推測できます。

1年余の間に3600個

王仁三郎聖師は、3600個という茶盌を残しました。一日の窯焚きで100個の茶盌を焼き、それを1年3カ月の間に36回も行っています。なぜそれが分かるかと申しますと、王仁三郎聖師は焼き終えるたびにいつも祖母にお心づけを下さいました。祖母はそれを毎回大事にしまっておいたのですが、後にその封筒を数えると36枚になっていたそうです。だから36回の窯焚きを行ったということが分かります。

祖父は、土の準備に大変苦労したそうです。一つの茶盌を作るのに約400グラムの土を使いますが、3600個ですと単純に計算して1・5トンの土が使われたことになります。祖父も、まさか3600個も作られるとは思ってもいませんでしたでしょうし、物資の乏しい時代、わが家の土もだんだん無くなってきますので、亀岡の大本の聖地の土を掘り起こして使ったそうです。

わが家は信楽の土を使っていました。聖地の土は赤土で、粘り気が少ないので、信楽土に混ぜて作っていましたが、次第

～21世紀・生きがい講座～

耀盌「御遊」

佐々木虚室（ささききょしつ）

松楽窯主

に信楽土も無くなっていきますと、聖地の赤土だけになります。粘り気がないので、作ってもすぐに形が崩れやすく、王仁三郎聖師は「へたる、へたる」と言って作っておられたそうです。耀盌の高台の辺りの釉薬を塗っていない「土見せ」の部分を見ていただいたら分かると思いますが、白い色をしたのは信楽土ですから初期のもので、それがだんだん赤土に変わっていくのが分かります。それが後期のもので、聖地の土です。

神のなし得る技

耀盌の大きな特徴は何といっても鮮やかな色彩です。エンジやグリーン、コバルトブルー、ピンクなどさまざまです。

楽焼の下絵（したえ）の顔料は、素焼の生地（きじ）に絵付けをして、その上から透明釉を塗って焼きます。その下絵の顔料も３６００個の茶盌に塗るほどのストックはありません。それで、途中から九谷焼の顔料を混ぜながら焼いたそうです。

ところが、九谷焼の顔料は上絵（うわえ）用です。茶盌に釉薬を付けて高温で焼き上げ、その上から絵付けして低温で焼くのが九谷焼です。楽焼の下絵と九谷の上絵の顔料は、専門的に申しますと収縮率が違いますので、混ぜて使うということはしません。耀盌のような発色が出ること自体、難しいことです。ところが成功している。まさに神のなし得る技としか言えません。

窯の温度は、赤楽で約８５０度の低温で１時間くらいかけて焼きます。黒楽は１２００度の高温で焼きますが、わずか５分間で取り出します。外側はこんがり、中身はレア状態です。そのことで、熱が茶盌の外に伝わりにくく、さらに一旦こもった熱は冷めにくくなります。この点も利休がこだわった点だと思います。

経年による美

もう一つ、茶の湯の精神に「さび」があります。経年によって寂（さび）れていくものの中から醸（かも）し出される美しさです。長次郎の「禿（かむろ）」も焼いた当初の色と現代のそれとは違っていると思います。当初は上塗りの透明釉が光っていたと思いますが、それが４００年の年月を経て、だんだんと透明釉の輝きが薄れて、黒楽本来の色が現れてきています。

耀盌も誕生して70年が立ちましたが、70年前の輝きと現在の輝きはおそらく違うと思います。70年前は透明釉によってもっと光っていたと思います。それが経年によって、本来の色彩がだんだん現れてきています。王仁三郎は、耀盌は「いずれ国宝になる」とおっしゃっていますが、今後、１００年、２００年たったらもっと違った色合いになると思います。

耀盌にはササラで刺した無数の穴があります。これは王仁三郎聖師の「惟神」の祈りが込められています。

それから「禿」の表面を見ていただいたら分かると思いますが、大変なめらかです。これに対して耀盌の表面は、でこぼこして、王仁三郎聖師が指で土を抑えた跡がそのまま残っています。

楽焼は手捏（こ）ねをした後、表面を削ってなめらかにしますが、王仁三郎聖師はあえて手捏ねの跡を残しています。そこにササラによる無数の穴と、艶のある透明釉の効果によって、キラキラと光の乱反射が生まれています。これらの点が、加藤義一郎氏が楽焼の常識からかけ離れた作陶法だというところだと思います。

ただし耀盌の内側は、楽焼の基本的なルールに従って作られています。茶巾（ちゃきん）ずれ、茶筅（ちゃせん）ずれ、茶溜（ちゃだ）まりがきちんと削られ、表現されています。

世界を駆け巡った耀盌

王仁三郎聖師は「芸術は宗教の母」「芸術と宗教の一致」を説いていますが、茶の文化は、まさに禅の精神によって形成され、「茶禅一味」の言葉のとおり、茶と禅は同じであり、王仁三郎聖師の教えに通じるものがあります。大本の中で茶の湯を学ばれていることは、まさに教えの実践であり、意義深いことなのです。

祖父は、王仁三郎聖師の茶盌が出来上がるたびに、「聖師さんはすごい、聖師さんはすごい」とよく申していたそうです。そして、「聖師さんはこの仕事が終わったら世界旅行に連れて行ってやると言われた」と話していました。ところが王仁三郎聖師は間もなくご昇天になります。それで祖父は「聖師さんは世界旅行に連れて行ってくれんかった」と言っていた矢先、耀盌がパリを皮切りに世界をめぐることになったわけです。祖父は、「聖師さんはやっぱり嘘はおっしゃらんかった」と申しておりました。

昭和47年から3年3カ月、耀盌は海外6カ国13都市を駆け巡り、20万人以上に見ていただきました。作品を見た海外の方々は、耀盌のビジュアル的な側面だけでなく、内面に込められた楽焼の精神性と、王仁三郎聖師が願われた天国の姿を感じられたのではないでしょうか。

掲載文は、令和元年9月18日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

月次祭・春季合同慰霊祭

東光苑月次祭・交通安全祈願祭・関東教区春季合同慰霊祭は3月8日午前10時30分から、斎主・加藤道明祭務課長のもと執行され、43人(係員含む)が参拝した。

祭員は東京主会が、大本神諭拝読は菊池まゆみ総務管理課主任が担当。当日は2月から国内で感染が拡大している新型コロナウイルスの予防対策のため、参拝の自粛を呼びかけた中での祭典執行となり、添釜や祭典後の諸行事も中止や延期となった。

祭典後、猪子恒東京宣教センター長があいさつに立ち、現在流行している新型コロナウイルスについて「本部では対策の一つとして祭典・行事等の中止や縮小、自粛をしている。3月の東光苑月次祭も両聖地に合わせ参拝を遠慮していただいた。新型コロナウイルスは先行き不透明であり世界中に不安が広がっている。聖師さまは『大三災小三災の頻発も人の心の反映なりけり』と示されている。病は小三災であり、小三災は人の努力によって左右されるものである。私たちは新型コロナウイルスが終息へ向かうよう真剣に祈願し、一人ひとりが出来る対策をとりながら、前向きな気持ちで信仰生活を送ることが大切である」と語った。

なお、参拝者には祭員から持ち帰り用として直会が手渡された。

21世紀・生きがい講座

第204回21世紀・生きがい講座は2月19日午後7時から、大本東京本部・東光苑で開催され、橋本伸作・東京宣教センター次長が「永遠を見すえて今に生きる」～死は終わりではない～と題して講話した。参加者は34人＝写真

橋本講師は、大本の死生観や霊界の組織について触れ、「精霊界（中有界）ではこの世（現界）で積んだ行いの善悪正邪が審かれる。そうなるともはや過去の罪をつぐなう術はない。しかし現界では悔い改めることができる。霊界に帰って後悔のないよう肉体のあるうちに日々の行いを省み、副守護神に打ち勝ち、少しでも善い行いに努め、心の中に天国を築いていかなければならない」と述べた。

参加者からは「省みる生活を心がけ現界でよい行いをしなくてはと思いました」「霊界の実在が実感できた」「副守護神の価値観が自身にも当てはまる所が多く耳が痛かった」等の声が寄せられた。

教本認定講習会

教本各級認定講習会が2月23、24の両日、大本東京本部・東光苑で開催され、1・2級クラスに1人、3級クラスに5人が受講した。

同講習会では、『実践リーダー教本』をもとに大本のみ教えを学んだほか、対話実習やミニ講話のスピーチなどを実習。受講者からは「大本の教えの全体の一端を知ることができ、有意義な時間でした」「対話実習・特に理解度チェックで大本の教えを整理して改めて理解が進んだ」などの感想が寄せられた。

東光苑 葬祭研修会

〝ご葬儀、ができた時、「自分が、もし遺族だったら、また、お手伝いに行ったら、何をどうしなければならないか」を、実技を中心に研修会を開催します。

内容として、葬儀執行の流れ（喪家の心得、みたままつり、お墓について）と斎場調度品について学んだ後、葬儀の司会進行の仕方、葬祭全般について研修していただきます。

日　時　5月30日（土）午前9時30分～31日（日）午後3時30分
会　場　東光苑・講座室（2階）、ほか
参加費　500円（食費、宿泊費は別途）
資料代　500円　霊祭部刊「葬祭式編」代（お持ちの方はご持参ください）
内　容　講話：葬儀執行の流れ、斎場調度品について
実習：招魂式、発葬式、火葬式、家祭式、毎十日祭、五十日合祀祭
持参品　笏、大本祭式の本、帯（紐）、足袋、筆記用具、宿泊用品など
申込み　食事・宿泊・資料の有無を明記の上、5月25日(月)までに、「葬祭研修会」宛にお申し込みください。
電話：03-3821-3701（祭務課）
メール：m-kato@oomoto.or.jp

第38回 企業安全繁栄祈願祭

日　程　4月26日（日）午前10時30分
場　所　大本東京本部・東光苑
申込み　ご希望の方は申込用紙を送付しますので、下記までご連絡ください
※（昨年申し込みいただいた方には、こちらから郵送いたします）
申込先　〒110-0008 台東区池之端2-1-44
大本東京宣教センター内 東光経友会
TEL 03-3821-3701　FAX 03-3821-5283
mail tokyohonbu@oomoto.or.jp
※玉串は後日郵送か当日持参かを必ず明記してください
玉串料　一企業につき1万円以上（申込書に添えて玉串袋にてお納めください）
お　札　ご希望の方には「大本平安彌栄祈願」の水引木札（申込企業名入り）をご下附させていただきます。（1体につき、玉串料は別途1万円以上）
締　切　4月20日（月）
※ご祈願は5月2日（土）までの1週間執り行います

5月 東光苑祭典・行事予定

4日（月・祝）午前10時30分～
教主生誕祭　三代教主・教主補聖誕祭
5日（火・祝）午前10時30分～
開教128年 みろく大祭遥拝祭
10日（日）午前10時30分～
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭
20日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（大本東京本部）
祈りとともにある生活
～本当の幸福とは～
講師　柿崎哲男（愛善宣教課主事）
30日（土）・31日（日）
東光苑葬祭研修会